

〈論文〉

日英語における太陽の色名に関する一考察 —— 対照言語学的観点から ——

浅見 吏郎

1. はじめに

鈴木 (1990) の中で、アメリカのクロスワードパズルで「太陽の色」と書かれた欄に“yellow”と答えたエピソードが書かれている。また、『太陽の色は何色か』と題した田村 (1976) でも、日本人の子供は太陽を赤で表現しているのに対し、外国の子供たちは“yellow”で表現している実例が述べられている。

佐竹 (1955) によると、古来の日本語には、4つの色名しか存在しないとされている。それらは、「アカークローシローアヲ」の対立であった。このことが「赤い太陽」と何か関連があるのであろうか。鈴木 (1990) の中では色彩を表現する際に使用される語句を、「弁別的用法」と「専門的用法」の2つに分けて説明をしている。弁別的用法とは、「色彩を手がかりに区別するための色彩語の用法」で、いわゆる赤砂糖、白砂糖、黒砂糖を例に挙げている。対して専門的用法とは、「色そのものを問題とするときの使い方」とし、赤砂糖を示して大抵の人は「茶色」と答えるときの状況を説明している。これらの弁別的用法や専門的用法が、太陽の色に関連するのであろうか。

本稿では、太陽の色について日本語と英語を比較検討し、認識の違いはどこから起こるのかを検証することを目的とする。

2. 色相・明度・彩度

色彩に関する語句が多々登場するので、本論に入る前に、色相、明度及び彩度について簡単にまとめる。

「色相 (hue)」とは、いわゆる「色合い」で、赤・青・黄・緑・紫などを示すものである。これらは波長の度合いによって、どのように目に映るかを示す語である。

「明度 (brightness; lightness)」は、光の通り具合を表し、高くなれば白っぽく見え、低くなれば黒っぽく見える。

「彩度 (chroma; saturation)」は、色の混ざり具合によって、どのくらい鮮やかさが現れるかを示すものである。高くなると生き生きとした色彩になり、低くなるとくすんだ感じが表れる。この論文では特に色相と明度を主に取り上げることになる。

3. 赤い太陽——日本語の場合

一般的に日本人に太陽の色を尋ねると、「太陽は赤い」と答える。このように答える原因として、田村 (1976) では以下のように分析している。

- (1) 子供の時は、空の太陽を見るというような経験はあまりなく、絵本で見た太陽や、友だち、先輩の描く太陽が、そのまま子供の太陽のイメージとなる。夕日を指して「お日さま」だと教えられたりするから、なおさら、お日さまとはあの赤い丸いのだと思ってしまう。

つまり、子供の時入力された概念から、「太陽は赤だ」と認識してしまうということである。では、なぜ日本では「太陽は赤い」という認識を持つてしまうのか。

太陽が赤く塗られることに関して、安藤 (1996) は次のように理由を述べている。一つには、「日本人にとって、太陽 (特に旭日) は、日の丸の旗と深く結びついている」という点に着目している。さらには、「その日の丸は、旭日であると同時に、『あかき心 (赤心)』を象徴するものではないか」と考えを述べている。そして、「日本人にとって太陽の色は、二重の意味で赤でなければならない」とまとめている。ではなぜ、我々は「太陽=赤」という色彩に拘るのであろうか。

近代日本文学を代表する作家、夏目漱石の作品『夢十夜』の中でも、太陽 (お日さま) の色について表現されている箇所が見られる。

- (2) a. 「日が出るでせう。それから日が沈むでせう。… (中略) …。赤い日が東から西へ、… (略)」
b. しばらくすると又唐紅の天道がのそりと上がってきた。

- c. じぶんはかう云う風に一つ二つと勘定して行くうちに、赤い日をいくつ見たか分からない。

作品の中では、太陽は日や天道で表現されているが、いずれも色彩は赤（アカ）であらわされている。また、これらが描かれている箇所は、朝日や夕日であることにも注目したい。

朝日や夕日は、日本人にとって強い興味や関心があると思われる。特に古典文学の分野では、朝日や夕日についての叙述が多く見られる。清少納言の『枕草子』は、色彩豊かな平安文学の中でも様々な表現がされている*¹。第一段では、以下のように太陽について描かれている。

- (3) 春はあけぼの。やうやう白くなりゆく山ぎは、少し明かりて…。(中略) 秋は夕暮れ。夕日のさして山の端いと近うなりたるに…。

ここでは、春は朝日が昇っていく様子が、秋には太陽が沈んでゆく様子が風情が感じられると表現されている。同様に古典の分野で和歌にも目を向けてみる。幽玄の美しさを歌に織り込んだ『新古今和歌集』には、三夕の歌として次の3つが記されている。

- (4) a. 題しらず 寂連法師
さびしさは そと色としも なかりけり 真木立つ山の 秋の夕暮れ
- b. 西行法師
心なき 身にもあはれは しられけり しぎ立つ沢の 秋の夕暮れ
- c. 西行法師すすめて百首歌よませ侍りけるに 藤原定家朝臣
見わたせば 花ももみぢも なかりけり 浦のとま屋の 秋の夕暮れ

この歌に現れているのは、秋の日が陰り始め、周りにこれといった色もないところに夕日の色が鮮やかに色彩を放っている、という情景である。古代日本語に表れる色彩語は、「色相」よりも「明度」及び「彩度」についてのみ表現されている。安藤（1996）も、「上代日本人の色の認知にとっては、〈色相〉よりも〈明度〉と〈彩度〉の違いの方が関与的であったらしい」と示している。

日本人の感覚の中には、朝日や夕日を特別な物としてとらえる傾向があるように思われる。そして、そこに描かれているのは赤い夕日（太陽）である。日中に天高く地上を照ら

し続ける太陽よりも、まさに登りゆく太陽や、地平線、水平線に静かに沈んでゆく太陽に心が引かれていったのであろう。三夕の歌はモノクロームかもしくはセピア色の様な表現である。しかし、その中で一際赤く空を染めている太陽に、人々の興味や関心が向けられた。その結果として夕日（太陽）は赤いという認識になったと考えられる。言い換えれば、興味や関心の度合いが高い朝日や夕日が、太陽という一般概念に結びつけられたのであろう。

さらに、「赤」という語自体に目を向けてみる。赤とは次のように定義される。

- (5) (「あか(明)」と同語源という) ①五色の一つ。七色の一つ。色の名。古くは青に対する色として、朱、橙、桃色などを含めて用いられた。…(略)。④血のような色。赤色。…(中略)…。【語誌】(1) アヲ・クロ・シロと並び、日本語の基本的な色彩語であり、古くは、光の感覚を示し「赤・明し・明く・明け」と同根の類をなし、「黒・暗し・暮る・暮れ」の類と対立している。(…略…)

『日本国語大辞典』より

語誌に注目すると、アカは本来光の感覚と考えられていたと言える。さらに、『語源辞典』によると「アカ」の語源は以下の通りになる。

- (6) あかい 赤い・紅い・明い

(略) 【語源】…(略)。夜が明けて空がだんだん白んでくると、つぎは赤みを帯びてくる。それを形容したのがアカイの語源である。アカネ(茜)色が赤い色を示すことばであるように光から色に推移することが古代から行われてきた。…(略)。

『語源辞典 形容詞編』

佐竹(1955)の中では、「形容詞アカシは、…《赤》であると共に《明》でもある」と記述している。これは、「アカ」の持つ意味が「明るい」と「赤い」に後世になって分化したと考えてもよいであろう。つまり、「アカイ(=明い)太陽」の意で使用されていた語が、後に音を同じくする「赤」に取って代わったものであろう。

以上の考察より、次のようにまとめる。

- (7) ①「アカイ」という表現には、1) 明るい、2) 色彩として赤い、の2通りの解釈がある。

- ②「明（アカ）い」は、色相よりも明度について述べられたものである。
- ③本来は明度を示していた「アカイ太陽」は、後に色相を示す「赤い」に変化していった。
- ④後世に、「明い」と「赤い」が混同して使われるようになった。
- ⑤日本人は、夕日や朝日に特別な興味・関心を持っており、その対象が一般化された。

以上が、日本の太陽が「赤い」と考えられる理由である。

4. 黄色い太陽

Wierzbicka (1996) の中で, “For yellow, the sun offers — perhaps — one natural point of reference (The fact that in children’s drawings and paintings the sun is represented as yellow reflects this association).” とある。英語では太陽は黄色で表される。また, 鈴木 (1990) で, フランス語では “Le soleil est jaune.” と, ドイツ語では “Die Sonne ist gelb.” と絵本に表現されていることを示している。実際に yellow とはどのような色彩であるのか, またどのような意味を含んでいるのか。

OED で yellow の項目を見ると, 中心となる意味は, 「金, バター, 卵の黄身, 様々な花等の様な色」と定義されている。また, 「green と orange の中間で, もっとも光を発する様なもの」をも意味している。つまり「光」が基本となっている。

須賀川 (1999) の研究では, 古期英語の基本色彩語は次の7色としている。

(8) blæc, whit, rēad, grēne, geolu, puple, græg

このうち, 現在の黄色を示す語 geolu は, 700 年頃から文献に登場している。さらに, 印欧語族の ghol-; ghel-; ghl- の派生語として, gall 及び gold についても言及している。これらの語は “to shine” の意味を持ち, 「…; OE geolow は, gold のような輝いた『黄金色』から, 緑に近い『萌黄色』を示したのではなかろうか」(須賀川:1999) という推測をしている。これらの語が指し示す領域は, 非常に明るい色彩を示していたと考えられる。

OED から, yellow 及び gold が太陽に関わる光について引用されている箇所を, 派生語も含めて引用すると,

YELLOW

- (9) A bright yellow sky at sunset presages wind. (1830. FITZ-ROY, *Mer. Marine Mag.* VII. 324)
- (10) In the * yellow-gleamy sunset, wild birds began to whistle faintly. (1930. *Phenix* (1936) I. 3)

YELLOWLY

- (11) When the fulfaced sunset yellowly Stays on the flowering arch of the bough. (1833 TENNYSIN, *Hesperodes* iv)
- (12) The evening sun seemed to shine more yellowly. (1886. HARDY, *Mayor Casterbr.* viii)

YELLOWNESS

- (13) That I . . . may . . . see your colour lyke the sonne bryght That of yelownesse hadde neuere pere. (1440. CHAYCER, *Purse* II)
- (14) Like the Sun (ev'n while Eclips'd) she casts A Yellowness upon all ot her Faces. (1663. DRYDEN, *Ribal Ladies* III. i)

GOLDEN

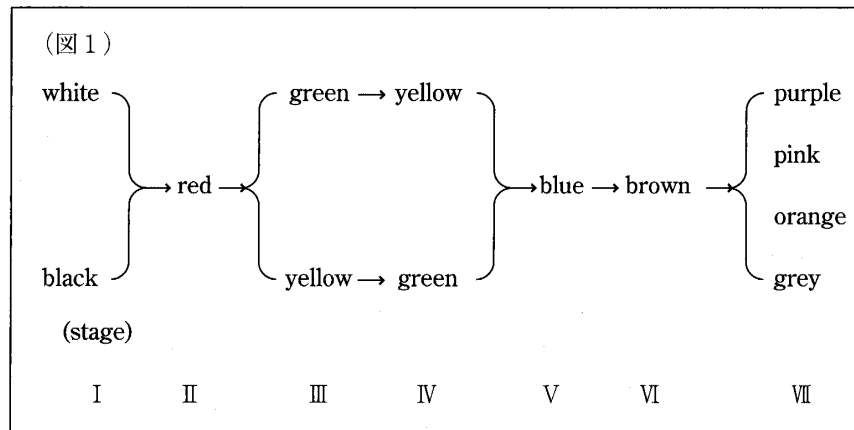
- (15) She saw sunshine sparkling on the water, in golden ripples. (1852. MRS. STOWE, *Uncle Tom's C.* vii 107)
- (16) The foldening sunlight (1863. A. B. GROSART, *Small Sins* (ed. 2) 102)

GOLDENLY

- (17) The sunlight . . . hovered under the dome like the holy dove goldenly descending. (1864. LOWELL, *Fireside Trav.* 313)

との記述が見られる。

ある言語の中で、色彩語句がどのように進化し増加してゆくのか、その過程について“Basic Color Terms” (Brent Berlin & Paul Kay: 1969) に示されている。ここでは基本となる色彩語句を11色で示し、様々な言語に於いて、どの言語にどの色彩語が存在するのかを調査している。色彩語が発展する順序は図1の通りである。どの言語にも、はじめに出現するのは“white”と“black”に相当する語で、これを第Iステージとする。次の第IIステージに“red”が現れ、第IIIステージでは、“green”もしくは“yellow”が現れる。しかしこの2つは同時に出るのではなく、どちらか一方のみの出現となる。その後第IVステージで、どちらにも“green”と“yellow”が現れる。“yellow”は第IIIステージもしくは第IVステージで現れていることが理解できるであろう。次いで第Vステージで“blue”、



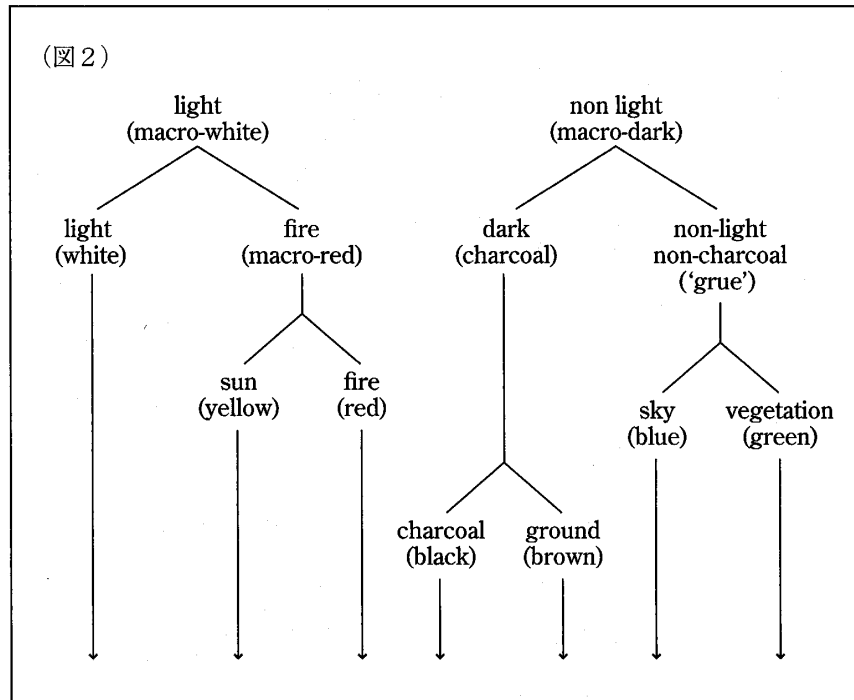
第VIステージで“brown”，最後の第VIIステージで“purple”，“pink”，“orange”，“grey”が順不同で現れ，すべての基本色が揃う。参考までに，Kayは後の論文で，第IIIステージから第Vステージのgreenとblueの現れ方について，若干の修正をしている*²。

太陽は光を与える。しかし，光そのものは色相を示すものではない。むしろ明るさ=明度の指標と考えて良いであろう。明度と色相の概念に関して，Casson (1997)は，“Hue was only minimally conceptualized in Old English, and did not become salient in conceptualizations of color until the Middle English period.”と記述している。これ以後の段階では色相はそれほど重要ではなかった。色相が重要視されるのは中期英語以降，アングロサクソン語以外の言語が流入した後，語彙が増加してからということになる。

一方，同じく光を表したと思われる“white”は，青白い光を指していたと考えられる*³。OEDでは“Of the colour of snow or milk; having that colour produced by reflection, transmission, or emission of all kinds of light in the proportion in which they exist in the complete visible spectrum without sensible absorption, being thus fully luminous and devoid of any distinctive hue.”と定義されており，印欧語でも“kweit- = to shine”の表記があるが，太陽の様な明るく輝いている様子ではなく，比較的青白く鈍い光を示していたと考えられる。

“red”が太陽の色彩を示すことはないのだろうか。実際にOEDの中では，“Of the sky or sun, sep. at dawn or sunset; hence of dawn, the east, etc.”と記述されている。朝日や夕日が赤いという感覚は，日本語・英語ともに共通である。ただし英語の場合，朝日・夕日の表現に限定されるのみで，一般化されていったのではないと考えることが出来るであろう。

Wierzbicka (1990)では，認知言語の立場から，色彩語がどのように認識され分化してゆくのか，その過程を提唱している(図2)。ここで使用されている“macro-”とは，漢



然とした状況を示していると考えて良い。ここで提唱されている“yellow”の位置も、「明るいもの；光のあるもの」として認識されている。

日没などの特別な状況に於ける太陽について叙述する際には red を使う例も見られている。しかし、太陽は明るいものという認識が強いため、Wierzbicka は、red は fire, yellow は sun というように表現している。red は色相を示しているが、明度は低いと感じられ、光を表すとは限らないということである。

これらから、以下のようにまとめる。

- (18) ①語源“geolu”は、印欧語レベルで gold と語源を同じくし、共通して光を表していたと考えられる。
- ② yellow は本来明度を示す語であった。
- ③ red は、比較的早い時期から、明度よりも色相を示していた。
- ④既存の red の領域に、yellow は入り込まず、別の色相を持つようになった。
- ⑤ white は、鈍く青白い感を持つために使用されなかった。

5. 色彩の類似点・相違点

共通する点は、日本語・英語とも、太陽は明るいものと捉えていることである。これは

いろよりもむしろ「光（源）」と考えられていると思える。「アカ」も“yellow (geolu)”も、本来は色相を表現する語ではなく、「明度」を表すものであったことも共通している。意味が変化した時期に前後はあるだろうが、2語とも同じ経路を通して現代の色彩語に根付いている。

異なる点は、アカと yellow が「色相」を表現するに至った経緯である。

日本語では、「アカ」は血のような生き生きとした色相を表現するものへと変化した。赤系統を示す語句は他に、丹（ニ）、紅（クレナイ）、茜（アカネ）、蘇芳（スオウ）、桜（サクラ）など他にもあった*⁴。これらの語は、赤系統を「弁別的用法」とすると、「専門的用法」と考えることができる。英語の yellow に相当する「黄（色）」については、古代の色彩には存在していなかった。佐竹（1955）の例にも記述があるように、特殊な用法であった*⁵。

対して英語の“yellow”は、語源を同じくする“gold”に引きずられた色相を示すようになったと思われる。“gold”は金属の輝きを表現するのに用いられ、“yellow”は輝きを失った色相を受け持つことになったのであろう。“red”について考えてみると、この語はいわゆる「赤さ」を示す色相を持っていた。そのため、昼間の空で明るく輝いている太陽の様子を表現することはなかった。

Casson（1997）では、中期英語以降に明度から色相へ変化したその過程を、以下の通り記述している。

- (19) The color shift from brightness to hue in the evolution of English Basic color terms can be seen as a response to an increasingly complex color world in the Middle English period (1150–1500). The development of secondary color terms, beginning in the late medieval period (1350–1500), can also be attributed to this increasingly diverse array of culturally significant colors. The response of culture members to these changes was a “cognitive refocusing.” Culture members restructured their systems of color categorization by shifting from brightness to hue, and then innovating simplex terms to encode numerous finely differentiated secondary hue categories.

中期英語以降は、外部から（アングロサクソン語以外）の言語が流入し、語彙が増加した結果、明度から色相へ変化したと見られている。

6. ま と め

洋の東西を問わず、太陽は明るい物であるという認識は共通している。つまり、明度に関わる表現は同じであったといっても良い。しかし、本来は明度を示した語に「色相」を持たせたとき、その語の示す範囲に違いが現れた。

日本語では、太陽を明るいものと感じていた。それが「明るい」につながり、さらに音を同じくする「赤」に変化していった。このとき、「アカ」には色相の持つ領域が含まれていなかった。明るいものの総称としての「赤」が定着してゆく過程で、明度と色相が混同され、「アカイ」という音に引かれた結果、太陽はアカイと考えられるようになった。また、日本人の興味関心が、朝日や夕日という特別な状況下に向いていたことも考えられる。

英語に於いても、太陽は明るいもの、“geolu”であるとの認識はあった。しかし“red”という語句が赤い色相を示していたため、外部の語彙が流入して以降も、“yellow”がその領域を侵すことは起きなかった。そして、redとは異なる色相を持つ“yellow”が現れた。

色彩語の概念、言い換えると色彩語の境界線は、全ての言語で共通とはいいたところがある。しかし、色相を離れ光を表現するときには、英語も日本語もほぼ同じ感覚を持っていたのであろう。その語の両語が育っていった言語背景の違いが、現在の際につながったと思われる。

今回は、英語の古典領域での作品で太陽がどのように扱われているのか、深く追究できなかった。時代背景を考慮に入れ、英語学的に見て、これらの語句がどのような変遷を経て今日に至っているのか、その変遷のきっかけになったものは何かも含めて、次の機会に改めて考察してみたいと思う。

- * 1 『枕草子』作品中には、474箇所、47色の表現があった。その中で「赤」が使われているのは37箇所、4番目に多く使われている色彩である。
- * 2 redの後には、yellowとGREWが出現する。その後、blueとなる。GREWとは、“green”の領域と“blue”の領域を含み、いわゆる日本語の「あお」に相当すると考えてもよいであろう。
- * 3 須賀川（1999）参照。
- * 4 ふりがなは、現代の表記法に統一してある。
- * 5 『源氏物語』の中で、「白き色紙、青き表紙、黄なる玉の軸なり」と、形容動詞として使用されている。

参考文献

- 安藤貞雄 (1996) 『英語の理論・日本語の理論 一対照言語学的研究一』, 大修館書店
- Berlin, Brent & Kay, Paul (1996) *Basic color terms: their universality and evolution*, CSLI
- Casson, Ronald W. (1997) "Color shift: evolution of English color terms from brightness to hue", *Color categories in thought and language*, Cambridge University Press.
- 小松英雄 (2001) 『日本語の歴史 一青信号はなぜアオなのか一』, 笠間書院
- 佐竹昭廣 (1955) 「古代日本語に於ける色名の性格」『国語国文』24 卷6 号
- 須賀川誠三 (1999) 『英語色彩語の意味と比喻 一歴史的研究一』, 成美堂
- 鈴木孝夫 (1990) 『日本語と外国語』, 岩波書店
- 田村すゞ子 (1976) 「太陽の色は何色か」『ILT NEWS』第 61 号 66-69, 早稲田大学語学教育研究所
- Wierzbicka, Anna (1990) "The meaning of color terms: semantics, culture, and cognition", *Cognitive Linguistics* Vol. 1-1, 99-150
- Wierzbicka, Anna (1996) *Semantics: Primes and Universals*, Oxford University Press

参考図書

- 久保田淳校注 (1979) 「新潮日本古典集成『新古今和歌集 上』」, 新潮社
- 萩谷朴校注 (1977) 「新潮日本古典集成『枕草子 上』」, 新潮社
- 夏目漱石著 (1981) 「現代日本文学大系 17 夏目漱石集 (一)『夢十夜』」, 筑摩書房

辞典類

- 日本大辞典刊行会編 (1974) 『日本国語大辞典』, 小学館
- Shimpson, J. A. & Weiner, E. S. C. Edt. (1989) *The Oxford English Dictionary, Second Edition*, London, Oxford University Press
- 寺澤芳雄編 (1997) 『英語語源辞典』, 研究社
- 吉田金彦編 (2000) 『語源辞典 形容詞編』, 東京堂出版

※この原稿は、日本英文英文学会北海道支部第 47 回大会で発表したものに、加筆修正をしたものである。発表に際して、懇切丁寧にご指導いただいた先生方には、心から深く感謝いたします。